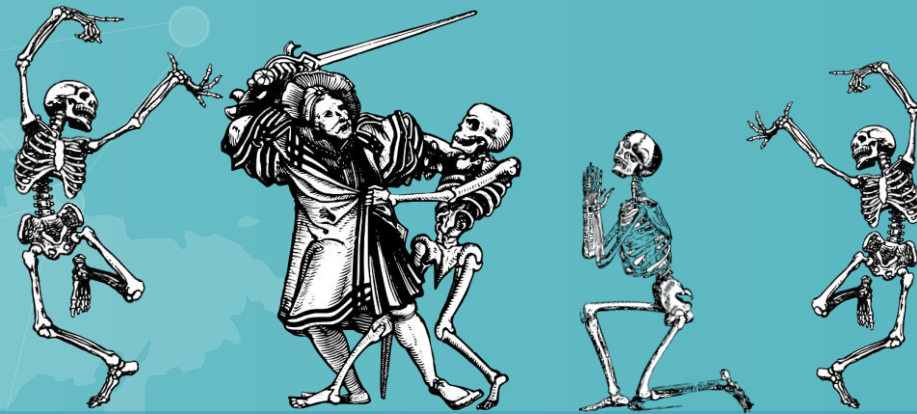




パンデミックのユーラシア史とポストコロナ

～モンゴル帝国史を起点としたペスト(黒死病)の欧州と日本の中近世史～



学 部 生	:	柳 沢	小 出	生 田	桑 原	池 田	成 田	古 川
大学院生	:	半 田	北 山	三 田	山 内			
修 了 生	:	光 永	塚 原	和 泉				
指導教員	:	金 美 徳	水 盛 涼 一					



研究方法

 文献研究とフィールドワークを中心に研究活動を行う。

 2017年～2019年はユーラシア大陸をつなげたモンゴル帝国やその周辺国に焦点をあてた。

 2020年は新型コロナウイルスによる世界的な感染拡大を踏まえ、パンデミックの歴史研究を行う。
グローバル化がもたらせたパンデミックによる現象とその影響、現代におけるポストコロナの世界を考える。

 歴史的観点、経営組織論、国際経営論からも分析

 フィールドワークは社会情勢や訪問先の都合も踏まえ計画

テーマ構成

1章

モンゴル帝国とパンデミック (半田・生田)

2章

欧州のパンデミック (北山・三田・小出・桑原・池田)

3章

パンデミックの日本への影響 (光永・山内・柳沢・古川)

4章

現代的意義とポストコロナ (塚原・和泉)

2017年～2019年 論文の結論 ～モンゴル帝国史研究史4年目

2017

「モンゴル帝国のユーラシア興隆史」 107ページ

「モンゴル帝国が現代にもたらすもの」

1. 「経済連携」による「平和と安定」
2. リーダー（チンギス・カーン）の「思想」と多様性の受容

2018

「モンゴル帝国の興隆と衰退」 244ページ

「得られた示唆」

1. 歴史は繰り返す：ゆるやかな統治の限界点
2. 拡大から縮小過程の生き方：成長だけではない生き方
3. リーダーの資質：資質とガバナンスの低下

2019

「モンゴル帝国と朝鮮半島」 84ページ

「得られた示唆」

1. 大帝国の属国でありながらも自らの価値を最大化する立ち回り
2. 柔軟な思考と強固なアイデンティティによる国家（組織）維持

年表(918年～1392年のうち1238年～)

高麗	中国・モンゴル帝国	日本
1238年 蒙古軍第5次高麗侵入 1247年 高麗、モンゴルへの貢納をやめる 1254年 蒙古軍第6次侵入 1258年 蒙古へ降伏 1259年 モンゴル(クビライ政権)に服属。 1270年 高麗「慈悲嶺」以北の広大な東寧路を奪われる。 1271年 忠烈王クビライの皇女、忽都魯揭里迷失(クトルク=ケルジシ)と婚姻の許諾を得る 1272年 忠烈王 クビライに日本侵略を提言。軍船の造船を申し出る 1274年 日本侵略のため、戦艦大小九百艘を造船する。 1287年 元、高麗に征東行省を設立(後期征東行省)高麗王を長官に任命 1297年 クビライの娘忽都魯揭里迷失死去。元との関係が壊れる	1253年 雲南の大理国、モンゴル帝国に降伏 1257年 ベトナムの陳朝、モンゴル帝国に降伏 1271年 モンゴル帝国のクビライ、国号を大元に改める。首都大都 1274年 元、日本に遠征し失敗 1276年 元のバヤンにより南宋滅亡 1279年 崖山の戦い 1281年 元、再び日本に遠征し失敗 1282年 チャンパ王国、元に降伏 1284年 元、再びチャンパ王国に遠征。その後、チャンパ、陳朝連合軍の抵抗により敗退 1292年 シンガサリ王国に遠征 1294年 クビライ・ハン死去 1361年 朱元璋が南京で大明を建てる	1247年 宝治合戦 1268年 北条時宗が執権に就く 1274年 文永の役 1281年 弘安の役 1285年 霜月騒動 1290年 浅原事件 1293年 平禅門の乱。鎌倉大地震 1305年 嘉元の乱
1392年 高麗が滅びる		

1347年～
ペスト(黒死病)
流行に着目

感染症の歴史

多数の死者を出した感染症の歴史

主な大流行

1300年より前

アテネの疫病
紀元前430年
推定死者数
10万人

アントニヌスの疫病
165～180年
350万～700万人

日本の天然痘
735～737年
100万人

ユスティニアヌスのペスト
541～542年
2500万～1億人

1300年代以降

ペスト（黒死病）
1347～51年
2500万～5000万人

天然痘（メキシコで流行）
1520年
800万人

ココリツトリ
（メキシコ、腸チフスの可能性）
1545～48年
1500万人

ココリツトリ
1578年
200万人

ロンドンの大疫病
（ペスト）
1665～66年
10万人

マルセイユの
大疫病（ペスト）
1720～23年
4万人

ロシアのペスト
1770～72年
10万人

スペイン風邪
1918～19年
5000万人

ロシア風邪
1889～90年
100万人

アジア風邪
1957～58年
110万人

香港風邪
1968～70年
100万人

● 死者100万人以上*
● 死者100万人未満

AIDS
1981年～
3200万人超

COVID-19
2020年～
13万人超
（4月16日現在）

エボラ出血熱
2014～16年
1万1300人

MERS
2012年～
850人

豚インフル
2009～10年
15万1700～
57万5400人

SARS
2002～03年
774人

*推定死者数は
出典により異なる

© AFP

出典: livescience.com/cdc.gov/ljdonline.com/britannica.com/ph.ucla.edu/history.com/ncbi.nlm.nih

流行は500年代、1300年代、1800年代後半の3回あったが特に大規模な流行が2、3回目であり、3回目の流行時での調査でパスツール研究所のアレクサンドル・エルサンはペスト菌の分離に成功

ペストとは

〈語源〉

ラテン語：ペスティス (Pestis)

古来サンスクリット語：ピー (Pvi)

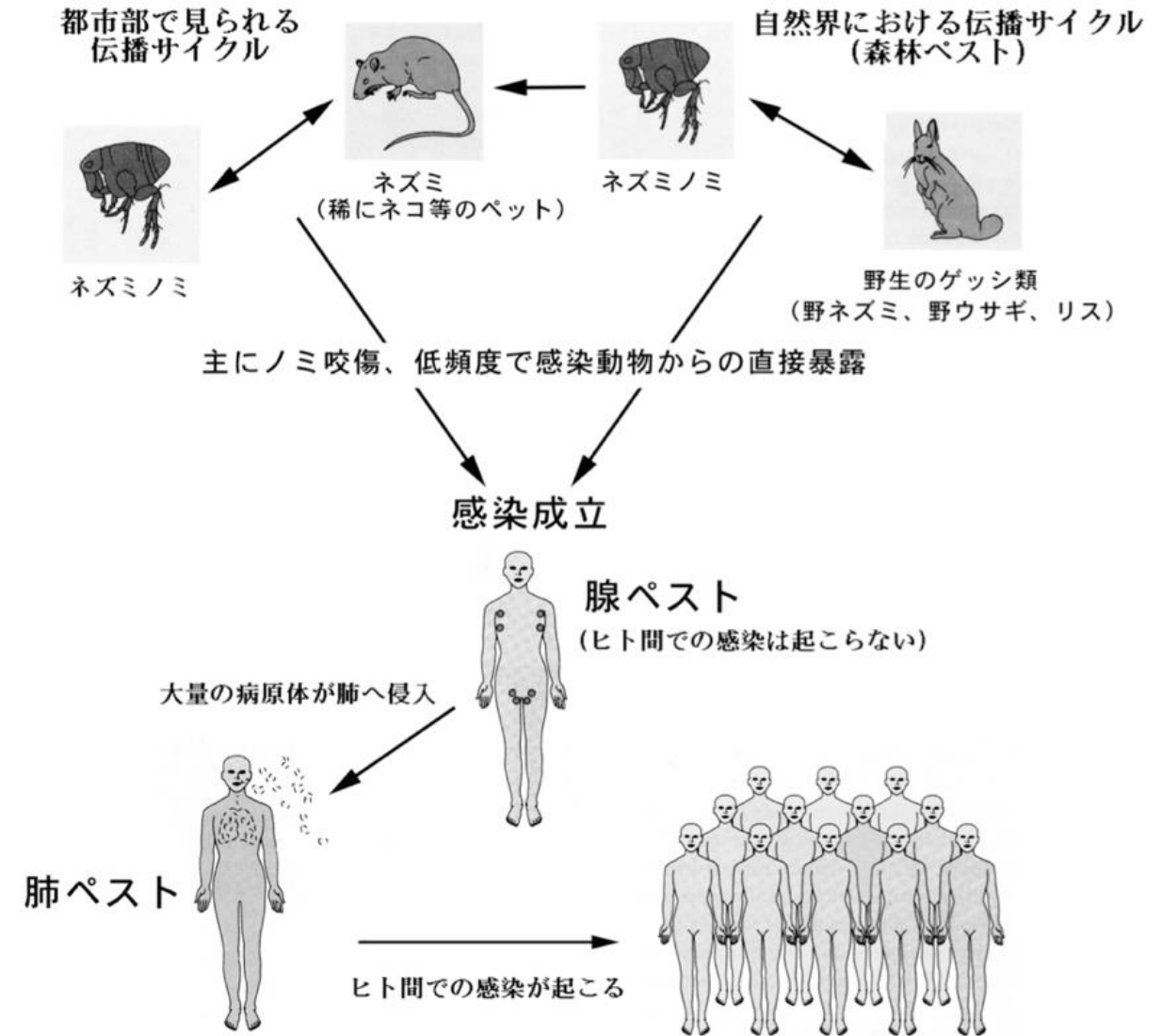
意味は「流行」「破滅」

全世界で二億人が死亡と考えられている

1 エルシニア属細菌の一種，ペスト菌
感染に起因する全身性の侵襲性感染症

2 げっ歯類を保菌宿主
主に節足動物（ノミ等）によって伝播

3 腺ペスト（ノミ媒介）、敗血症ペスト、
肺ペスト（空気感染）が感染経路



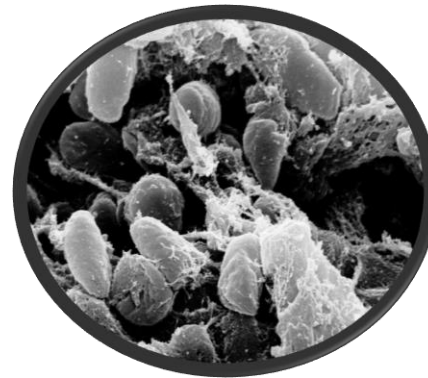
ウイルスと細菌の違い

	ウイルス	細菌
大きさ		
核 酸	DNAかRNAのどちらか一方しか持っていない	DNA、RNAを両方持つ
増 殖	単独では増殖できない。宿主の細胞に侵入し増殖	細胞が二分裂して増殖
主な病原体【感染症】	コロナウイルス【かぜ、呼吸器症候群】、インフルエンザウイルス、ヘルペスウイルス、ノロウイルス、ポリオウイルス、HIV【エイズ(後天性免疫不全症候群)】	百日咳菌、結核菌、ヘモフィルスインフルエンザ菌b型(Hib=ヒブ)、ブドウ球菌、大腸菌、コレラ菌、赤痢菌
治 療	抗生物質(抗菌薬)が効果を示さない。治療薬に限られる	細菌の特徴に合わせたさまざまな抗生物質がある

ペストは細菌

ペスト菌の発見

ペストの病原菌は、
1894年（明治27年）6月14日、
流行下の香港で北里柴三郎が発見し、
論文が英国の著名な医学誌ランセットに掲載。



北里柴三郎(1853-1931)
資料/学校法人北里研究所

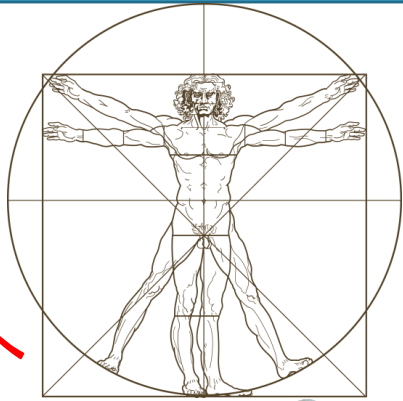
翌週、同じく香港でフランスの
アレクサンドル・エルサン（A. Yersin）も見つけ、
論文はフランスのパスツール研究所年報に掲載。



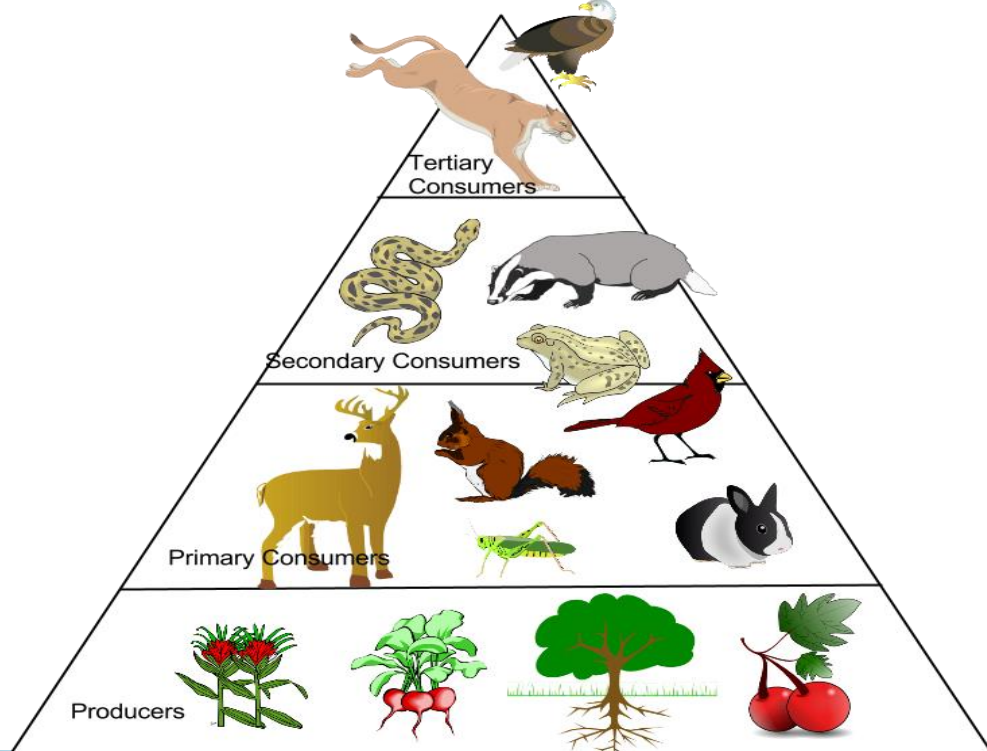
アレクサンドル・エルサン
(Alexandre Yersin, 1863-1945)

栄誉は雑菌を分離して発表した
アレクサンドル・エルサンのものになった

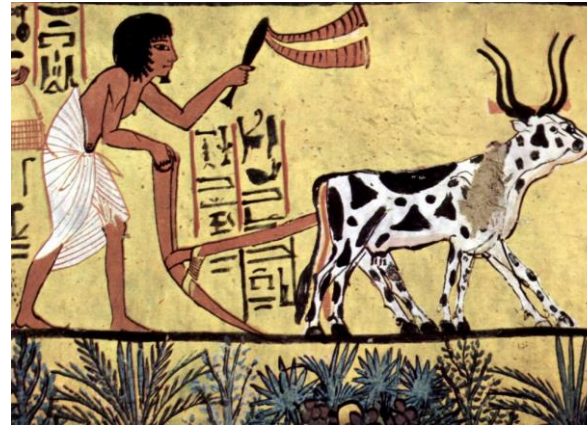
ヒトの進化が及ぼしたウイルス・細菌への影響



ヒト
生態系の頂点へ



Images collected from <http://www.ciker.com>

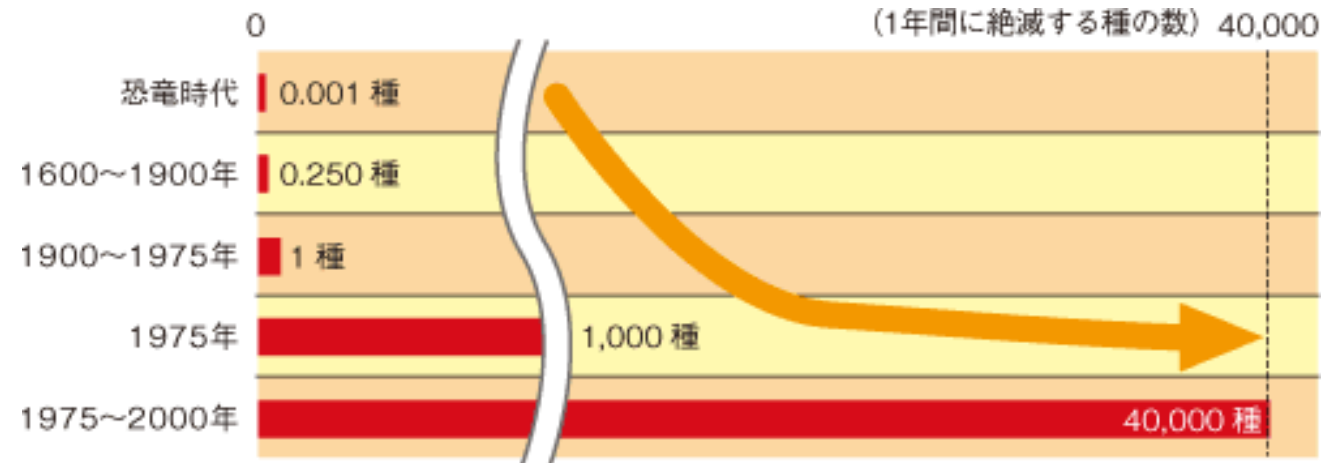


衣服

住居

道具

農耕と畜産により、
地球史各地でヒト増加



資料：ノーマン・ワイヤー著「沈み行く箱船」(1981)を基に作成

ヒト増加は生態系、動植物の分布形態をゆがめ占拠し、
動植物の「種」はより少なく「数」はより多く

文明内で収まっていた従来の感染



人口集中地域はヒトを宿主とする感染連鎖の確立に好都合

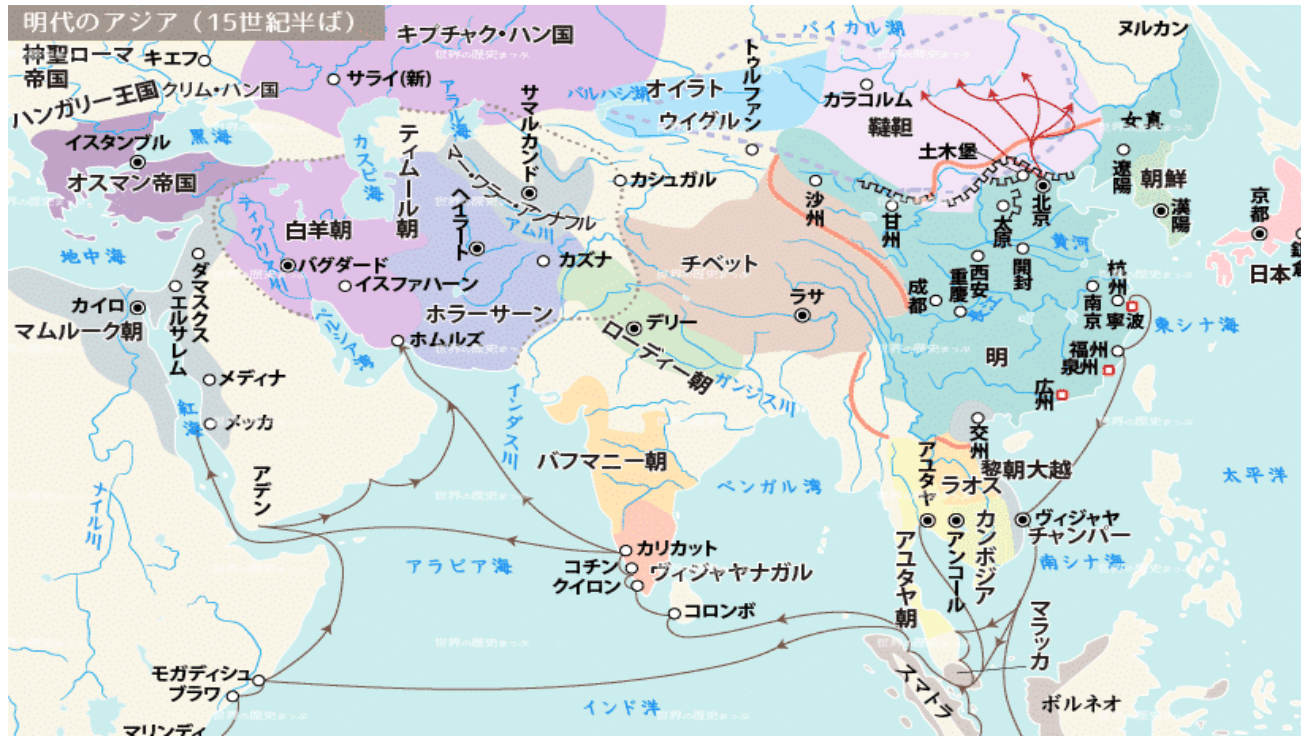
- 人口集中地域では寄生のバランスが整えられていた。
- 文明間同士の定期的な何らかの安定した組織的な機構はなかった
⇒ 感染症が広がる機会はごく稀だった

アジア・ユーラシアを横断したペスト（黒死病）



900～1200年にユーラシア陸路海路にて東西交流が進む。
モンゴル帝国最盛期1279-1350年は長距離移動の隊商や軍隊などが往来する 1 大交通網が完成
中国からクリミア、そこから船でヨーロッパと中東のほとんど全ての地域に侵入

世界に拡散したペスト（黒死病）



ドイツのMichael Wolgemut (1434–1519)、
1493年作「Tanz der Gerippe」（死の舞踏）

13～14世紀…疫病の時代（モンゴルとその後）

15世紀 ……祈っても神は助けず

- 科学による神学の乗り越え（ルネサンス）
- 人口減を補う技術開発（産業革命の萌芽）

問題意識 計16件

1. モンゴル帝国とパンデミック

- ①ウイルスや細菌との共生と国家維持の間に相関はあるか(半田)
- ②モンゴル帝国内の感染が引き起こした変化とは(生田)

2. 欧州のパンデミック

- ①ペスト(黒死病)後の人口減少の影響と、社会構造の変化について(三田)
- ②ペスト(黒死病)が中世欧州の芸術に与えた影響について(小出)
- ③ユダヤ人迫害の原因と宗教的背景について(桑原)
- ④ペスト(黒死病)の感染拡大の原因と対策(池田)
- ⑤なぜ欧州人はキリスト教を棄てなかったのか(北山)
- ⑥なぜユダヤ人迫害は起こり、後世にどのような影響を与えたのか(北山)

3. パンデミックの日本への影響

- ①日本の熱心な神仏信仰の裏には、実は疫病が大いに関係していたのではないか(山内)
- ②14世紀ペスト(黒死病)が伝播しなかったことと日元貿易の関連性、15世紀梅毒が伝播したことと日明貿易・倭寇との関連性の違いはあるのか。(光永)
- ③モンゴル帝国の属国であった高麗に、14世紀ペスト(黒死病)が伝播しなかったのはなぜか、日本との違いは何か。(光永)
- ④モンゴル帝国の侵攻を退けた日本とベトナムであるが、14世紀ベトナムはペスト(黒死病)に侵され、日本は防げた要因は、往来や貿易の違いにあるのか。(光永)
- ⑤江戸時代までの日本人は感染症に対しどのような意識を持ち、どの程度の危機感を持っていたのか、具体的な感染症対策は何だったのか。(柳沢)
- ⑥江戸時代「4つの口」と感染症の関連性はどのようなものか。(柳沢)
- ⑦日本人の自然観と海外の自然観の違いによって、感染症の広がりには関係性があるのか。(古川)
- ⑧感染症の病原体特定やワクチン・治療薬開発に、日本人はどれだけ貢献したのか(光永)

問題意識（まとめ）

1. モンゴル帝国とパンデミック

- ①ウイルスや細菌との共生と国家維持の間に相関はあるか（半田）
- ②モンゴル帝国内の感染が引き起こした変化とは（生田）

2. 欧州のパンデミック

- ①ペスト（黒死病）の感染拡大の原因と対策（池田）
- ②ペスト（黒死病）後の人口減少の影響と、社会構造の変化について（三田）
- ③宗教・芸術・ユダヤ人迫害に見るペスト（黒死病）前後の欧州人の心性の変容（小出・桑原・北山）

3. パンデミックの日本への影響

- ①日本の神仏信仰と疫病の関連性（山内）
- ②日本における貿易・経済と感染症（柳沢・光永）
- ③感染症と日本人の思想・心理（古川）
- ④日本の科学技術・産業発展と感染症（光永）



問題意識

1. モンゴル帝国とパンデミック



モンゴル帝国とパンデミック



- ・モンゴル帝国の地理・歴史・組織等を、ウィルスや細菌と関連付けながら研究する
- ・この章の基軸となるのは、ペスト（黒死病）の感染拡大の原因といわれる「**一大交通網**」

文献が乏しいため、

- ・2017年度以後のモンゴル帝国研究を応用
- ・宋や明などの前後の歴史にも触れる



問題意識

2. 欧州のパンデミック



「欧州のパンデミック」問題意識

- ①ペスト(黒死病)の感染拡大の原因と対策(池田)
- ②ペスト(黒死病)後の人口減少の影響と、社会構造の変化について(三田)
- ③宗教・芸術・ユダヤ人迫害に見るペスト(黒死病)前後の欧州人の心性の変容(小出・桑原・北山)

問題意識 (3. 欧州のパンデミック)

ペスト(黒死病)の感染経路

出典: The National Interest (2018)



1346 1347 1348 1349 1350 1351 1352 1353

Approximate border between the Principality of Kiev and the Golden Horde - passage prohibited for Christians.

Land trade routes
Maritime trade routes

歴史上の人類の大量死の原因

	時期	大量死の原因	死亡者数(推計)
感染症	1347-51 年	ペスト	7,500 万人
	1918-20 年	スペイン・インフルエンザ	5,000 万人
戦争	1939-45 年	第 2 次世界大戦	5,000 万人
	1851-64 年	太平天国の乱	数千万人
	1914-18 年	第 1 次世界大戦	900 万人
ホロコースト(大量虐殺)	1311-40 年	蒙古族による中国農民虐殺	3,500 万人
	1937-53 年	スターリンによる粛清	1,200 万人
	1933-45 年	ナチのユダヤ人虐殺	600 万人

※ 「人類と感染症の歴史 - 未知なる恐怖を超えて」 加藤茂孝著(丸善出版, 2013 年)をもとに、筆者作成

出典: ニッセイ基礎研究所(2018)

欧州人の心性変容

12・13世紀

温暖な気候

農地拡大

人口増加
都市建設

余剰生産
↓
交易活性化

1347年～

ペスト(黒死病)の時代
凶作・虫害による飢饉
大地震・雪害

ペスト(黒死病)発生

心性の変容

ペスト(黒死病) = 神罰
神は慈愛⇒畏れの対象
memento mori (死を想え)

ペスト
(黒死病)以後
内省

鞭打ち修行僧
宗教私物化

排他
↓
他者迫害
(障碍者・ユダヤ人
異端審問所)

ペスト(黒死病)の爆発的な感染力と高い致死率

神による罰《温厚な神から峻厳な神へ》

教会では救いを得ることができない

宗教の私物化、現実逃避

問題意識 (3. 欧州のパンデミック)



出典：ハンス・ホルバイン「死の舞踏」



出典：ベルン大聖堂（スイス）

14世紀のユダヤ文化圏



出典：黒川知文
『ユダヤ人迫害史』

ペスト(黒死病)期のユダヤ人迫害

ゲトトでの集住

神の怒りを鎮めるいけにえ

ユダヤ人迫害

教会・王権が迫害を許容

神を殺した罪人

欧州各地での追放、ルーマニア・ウクライナへの移住

迫害が無実化（金貸しだから殺された）

迫害が許容されたまま後世へ



問題意識

3. パンデミックの日本への影響



「パンデミックの日本への影響」 研究分担

1. 日本の神仏信仰と疫病の関連性(山内)
2. 日本の貿易・経済と感染症(柳沢・光永)
3. 感染症と日本人の思想・心理(古川・柳沢)
4. 科学の進歩と日本における感染症(光永)

日本の神仏信仰と感染症



日本の熱心な神仏信仰の裏には疫病が大いに影響していたのではないか。

日本の神々は和魂(にぎたま)と荒魂(あらたま)とを併せ持ち、怒らせると荒魂神となり、祟りとなる。疫病は天の神々や地の神々の支配で生ずるもの。

→日本では古より病気を神仏の祟りとして、とりわけ天下に大流行する疫病は、天皇の失策によって天地に異変が起こり、発生すると信じていた。

▶神々を怒らせないように祈祷が行われる

仏教伝来と疫病の流行(日本書紀)

朝廷では、疫病・災害・飢餓に際して、維摩会、仁王会、大般若会、最勝会などを設けて読経を行った。737年の痘瘡大流行の際、聖武天皇は、諸国に釈迦仏像と挟持菩薩の造立を命じ、大般若経を写経させた。

平安時代まで

- ・痘瘡の際は般若経の読経など、幕府が大規模な祈祷を行う

江戸時代から

- ・庶民、各人が神仏に祈る

▶病気の理由がわからないため、古来のしきたりをひたすら守る以外に方法がなかった。

痘瘡神として疫病神をまつ

→痘瘡は新羅からくる病のため、三韓降伏の守り神『住吉大明神』をまつれば病魔に勝つと信じていた。

江戸では出雲大社の末社鷲明神を痘瘡神としてまつた。

現代にも続く神仏信仰

→疫病を予言し疫病退散する妖怪『アマビエ』がグッズ化し流行、困った時の神頼みは未だ色濃く残る。²⁴

日本における感染症と「科学発展史」

紀元前	7世紀	14世紀	16世紀	17世紀	19世紀	20世紀	現代
パンデミック		ペスト (黒死病)	梅毒	天然痘	ペスト コレラ・結核	スペイン風邪 インフルエンザ	SARS MARS COVID-19
病原体					細菌の発見	ウィルスの発見	
顕微鏡		顕微鏡発明 1550年			光学顕微鏡進歩 17世紀後半～	電子顕微鏡発明・進歩 1932年～	

日本人の貢献

緒方洪庵



天然痘
19世紀

北里柴三郎



ペスト菌発見
19世紀

志賀潔



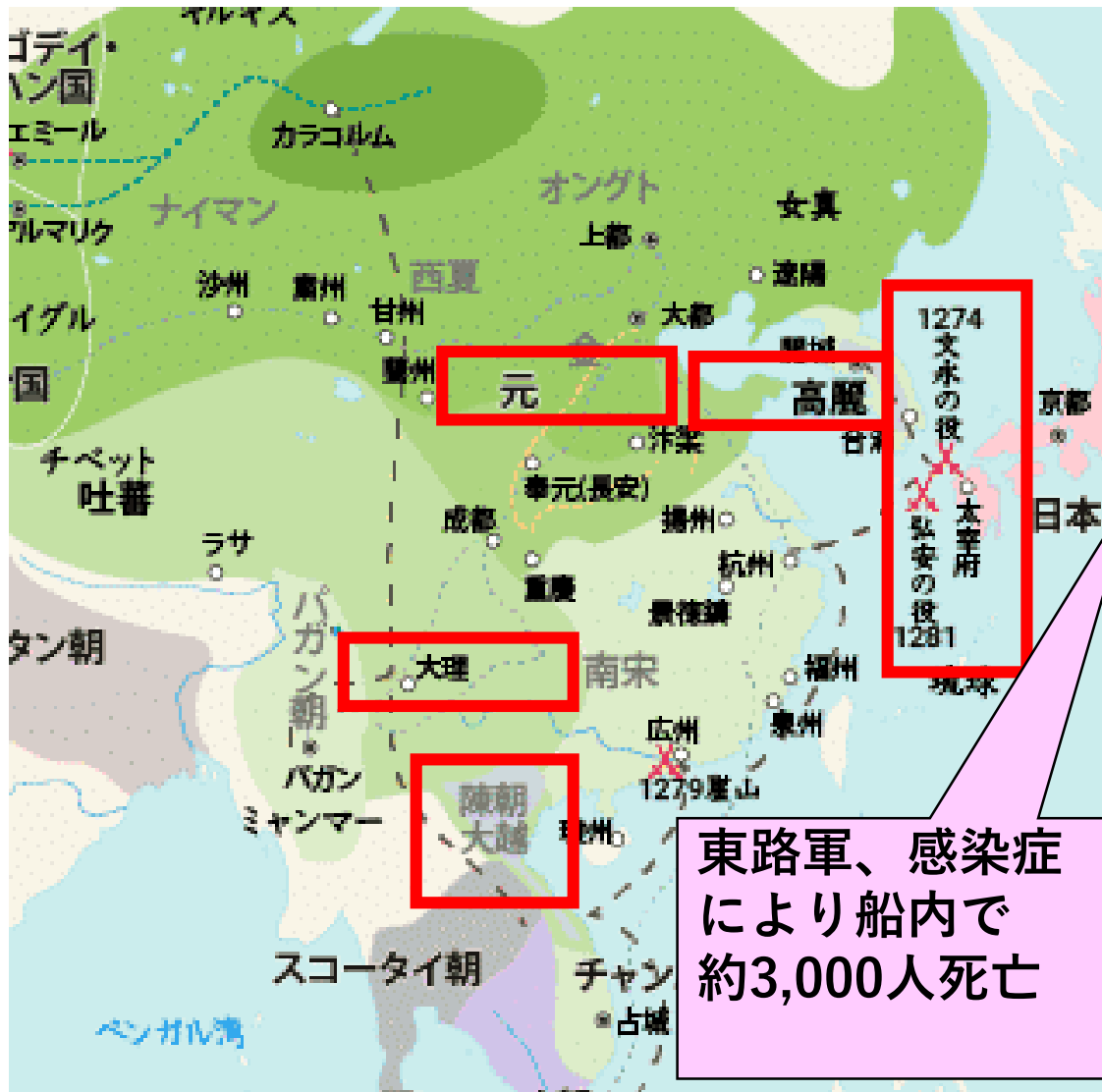
赤痢菌発見
19世紀

秦佐八郎



梅毒特効薬開発
20世紀

モンゴル帝国の雲南侵攻～ペスト拡大期の東アジア（13・14世紀）



1253年：雲南・ビルマ侵攻

1259年：第4代皇帝モンケ・カーン感染症により死去

1274年：文永の役（元寇）
1281年：弘安の役（元寇）

1258年
1285年：ベトナム侵攻
1288年

1331年：ペスト中国で流行

1347年：ペスト欧州で流行

ペスト
きっかけ

日本

日本

マラリア
疱瘡
赤班
咳病

ペスト発生せず

ペスト
発生

ペスト
拡大

14世紀の貿易とペスト(黒死病)の伝播(日本と欧州の違い)

日本にペストが伝播しなかった理由:

- ①貿易品目: 日本「銅銭・陶磁器・茶・書画」 欧州「絹織物・毛皮」
- ②貿易量: 日元貿易は、管理貿易の中の民間貿易活況





問題意識

4. 現代的意義とポストコロナ



年間スケジュール

春

回	月	日	議 題	文献調査	フィールドワーク	備 考	
1	5	16	初回学長講話 自己紹介 今年度テーマ方向性				
2		23	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		年間スケジュール確定 Google driveシェア Facebookグループ作成	
3		30	分担発表	次回ベース文献疑問など報告		アジア班メンバー確定	
4	6	6	分担発表	次回ベース文献疑問など報告			
5		13	分担発表 研究計画発表PPT確認	文献集計・目次			
6		20	分担発表 研究計画発表PPT確認	文献集計・目次			
7		27	分担発表 研究計画発表PPT確認	文献集計・目次	FW検討（仮）		
8	7	4	◆研究計画中間発表	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク			〇〇時集合
9		11	◆研究計画中間発表	研究テーマ、目的、問題意識、目次、文献、フィールドワーク			〇〇時集合
10		18	研究計画発表反省 中間発表に向けた計画				
11		25	箱根発表（？）目次建て	中間発表に向けた討議			
12	8	1	箱根発表（？）PPT確認	中間発表に向けた討議			
		8	休講				
		27/28	◆夏季合宿（予定） 箱根水明荘	発表者（役割分担）：1.研究概要、 2.目次、3.内容、4.参考文献・研究計画・FW			
		下旬	◆フィールドワーク実施？				

秋

		5	休講（？）			
		12	休講（？）			
13	9	19	下期進行確認 分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		年間スケジュール再確認 下期加入メンバー確定
14		26	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
15		3	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
16		10	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
17		17	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
18	10	24	分担発表	各執筆原稿の発表(状況報告)		
19		31	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	各自完成版を持ち寄る		
		7	講義なし（学園祭？）			
20		14	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	全体を印刷して確認		
21	11	21	PPT目次レビュー 分担確認 論文推敲全体確認	全体を印刷して確認		
22		28	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
23		5	PPTレビュー AL祭・最終発表に向けて			
24	12	12	◆アクティブラーニング祭	アクティブラーニング(AL)祭（多摩キャンパス？）		
25		19	◆論文発表			
26		26	◆論文提出日			メール送付期限
		2	休講			
27		9	2019年度最終講義			
	1	16	センター試験（休講？）			昨年度参考
28		23	◆論文提出/懇親会 (年度最終日)	最終論文(完成版)提出日		

9月ごろ
フィールドワークの予定

フィールドワーク予定

➤ 専門家からのヒアリング

候補

1. 脇村孝平：大阪市立大学教授 66歳 インド社会経済史、アジア経済史、グローバル・ヒストリー
著書「疾病・開発・帝国医療-アジアにおける病気と医療の歴史学」
論文「疫病のグローバルストーリー 疫病史と交易史の接点」「疫病と世界史」
2. 加藤茂孝：元国立感染症研究所所長、保健科学研究所学術顧問 78歳 理学博士
著書「人類と感染症の歴史(2013)」 「続・人類と感染症の歴史(2018)」
3. 新村拓 ：北里大学名誉教授・医療史学者 74歳 専門は日本医療社会史
著書「日本の医療史」「日本仏教の医療史」「死と病と看護の社会史」
4. 黒川知史：中央学院大学現代教養学部 教授 66歳 文学博士 専門は西洋史、宗教史
著書「西洋史とキリスト教 ローマ帝国からフランス革命まで」「ユダヤ人の歴史と思想（2018）」
5. 石坂尚武：元同志社大学文学部教授 73歳 専門はイタリアペスト史研究
著書「苦難と心性——イタリア・ルネサンス期の黒死病（2018）」
6. 木村伊量：ジャーナリスト、朝日新聞社前代表取締役社長 67歳
共著「奇想遺産Ⅱ－世界のとんでも建築物語－（2008）」

参考文献・論文 全78件

➤ 図書52冊

1. 寺島実郎『日本再生の基軸』（岩波書店,2020）
2. 飯島渉『ペストと近代中国』（研文出版,2000）
3. 飯島渉『感染症の中国史——公衆衛生と東アジア』（中公新書、中央公論新社,2009）
4. 飯島渉『感染症と私たちの歴史・これから』（歴史総合パートナーズ第4巻、清水書院,2018）
5. 石坂尚武『どうしてルターの宗教改革は起こったか——ペストと社会史から見る』（ナカニシヤ出版,2017）
6. 石坂尚武『イタリアの黒死病関係史料集』（刀水書房,2017）
7. 石坂尚武『苦難と心性——イタリア・ルネサンス期の黒死病』（刀水書房,2018）
8. 氏家幹人『江戸の病』（講談社選書メチエ437、講談社,2009）
9. 荻上チキ『検証 東日本大震災の流言・デマ』（光文社新書518、光文社,2011）
10. 梶田昭『医学の歴史』（講談社学術文庫,2003）
11. 川島高峰『銃後——流言・投書の太平洋戦争』（読売新聞社,1997）
12. 海音寺潮五郎『蒙古の襲来』（河出書房新社,2008）
13. 蔵持不三也『ペストの文化誌—ヨーロッパの民衆文化と疫病』（朝日新聞社,1995）
14. 黒田俊雄『日本の歴史 8—蒙古襲来』（中央公論新社,1974）
15. 小松左京『復活の日』（早川書房,1964）
16. 酒井シヅ『日本の医療史』（東京書籍,1982）
17. 酒井シヅ『病が語る日本史』（講談社,2002）
18. 佐藤健二『流言蜚語——うわさ話を読みとく作法』（有信堂高文社,1995）
19. 島崎晋『人類は「パンデミック」をどう生き延びたか』（青春出版社,2020）
20. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡（下）』（講談社現代新書,1996）

21. 杉山正明『モンゴル帝国の興亡(上)』(講談社現代新書,1996)
22. 立川昭二『病気の社会史——文明に探る病因』(岩波現代文庫、岩波書店,2007)
23. 田村実造『中国文明の歴史 7—大モンゴル帝国』(中央公論新社,2000)
24. 東北学院大学 震災の記録プロジェクト・金菱清(ゼミナール) 編
『呼び覚まされる霊性の震災学——3・11 生と死のはざままで』(新曜社,2016)
25. 新村拓『日本医療社会史の研究——古代中世の民衆生活と医療』(法政大学出版局,1985)
26. 新村拓『死と病と看護の社会史』(法政大学出版局,1989)
27. 新村拓編『日本医療史』(吉川弘文館,2006)
28. 新村拓『日本仏教の医療史』(法政大学出版局,2013)
29. 富士川游『日本疾病史』(吐鳳堂,1912)
30. 見市雅俊『コレラの世界史』(晶文社,1994)
31. 宮崎揚弘『ペストの歴史』(山川出版社,2015)
32. 村上陽一郎『ペスト大流行——ヨーロッパ中世の崩壊』(岩波新書黄版225、岩波書店,1983)
33. 百島祐貴『医学生のための医学史』(ボイジャー・プレス／医学教育出版社,2017)
34. Albert CAMUS (アルベール・カミュ)『La peste (ペスト)』(創元社,1950)
35. Connie WILLIS (コニー・ウィリス)『Doomsday book (ドゥームズデイ・ブック)』(早川書房,1995)
36. Daniel DEFOR (ダニエル・デフォー)『A journal of the plague year (ペストの記憶)』(研究社,2017)
37. Gabriel GARCÍA MÁRQUEZ (ガブリエル・ガルシア=マルケス)
『El amor en los tiempos del cólera (コレラの時代の愛)』(新潮社,2006)
38. Guy Richard (ギ・リシャール)『Ailleurs, L'herbe est plus verte
(移民の一万年史—人口移動・遥かなる民族の旅)』(新評論,1996)
39. Jack Weatherford (ジャック・ウェザーフォード)
『チンギス・ハンとモンゴル帝国の歩み—ユーラシア大陸の革新』(パンローリング,2019)

40. Janet L.Abu-Lughod (ジャネット・L・アブー＝ルゴド) 『ヨーロッパ覇権以前 (上) 』(岩波書店,2001)
41. Janet L.Abu-Lughod (ジャネット・L・アブー＝ルゴド) 『ヨーロッパ覇権以前 (下) 』(岩波書店,2001)
42. Jared DIAMOND (ジャレド・ダイヤモンド) 『Guns, germs, and steel: the fates of human societies (銃・病原菌・鉄——一万三〇〇〇年にわたる人類史の謎) 』(草思社,2000)
43. Jean-Marie Gustave LE CLÉZIO (ル・クレジオ) 『La quarantaine (隔離の島) 』(筑摩書房,2013)
44. John KELLY (ジョン・ケリー) 『The great mortality : an intimate history of the Black Death, the most devastating plague of all time (黒死病——ペストの中世史) 』(中央公論新社,2008)
45. José SARAMAGO (ジョゼ・サラマーゴ) 『Ensaio sobre a cegueira (白の闇) 』(日本放送出版協会,2001)
46. Norman F. CANTOR (ノーマン・カンター) 『In the wake of the plague : the Black Death and the world it made (黒死病——疫病の社会史) 』(青土社,2002)
47. Sandra HEMPEL (サンドラ・ヘンペル) 『ビジュアル パンデミック・マップ——伝染病の起源・拡大・根絶の歴史』(日経ナショナル ジオグラフィック社,2020)
48. Walter SCHEIDEL (ウォルター・シャイデル) 『The great leveler: violence and the history of inequality from the stone age to the twenty-first century (暴力と不平等の人類史——戦争・革命・崩壊・疫病) 』(東洋経済新報社,2019)
49. William H. McNeil (ウィリアム・H・マクニール) 『Plagues and Peoples (疫病と世界史) 』(新潮社,1985)
50. William J. Bernstein (ウィリアム・バーンスタイン) 『A Splendid Exchange (交易の世界史 (上)) 』(ちくま学芸文庫,2007)
51. Willy Hansen・Jean Freney (ウィリー・ハンセン、ジャン・フレネ) 『細菌と人類』(中公文庫,2008)
52. Yuval Noah HARARI (ユヴァル・ノア・ハラリ) 『Sapiens: a brief history of humankind (サピエンス全史——文明の構造と人類の幸福) 』(河出書房新社,2016)

➤ 論文24件

1. 寺島実郎『宗教改革が突き動かしたもの』（『世界』第833号（2012年8月号）、岩波書店,2012）
2. 寺島実郎『プロイセン主導の統合ドイツに幻惑された明治日本——モンゴルという衝撃——
十字軍と蒙古襲来』（『世界』第903号（2018年1月号）、岩波書店,2017）
3. 寺島実郎『中国の強大化・強権化を正視する日本の覚悟』
（『世界』第906号（2018年4月号）、岩波書店,2018）
4. 寺島実郎『大中華圏とモンゴル、その世界史へのインパクト』（『世界』第907号（2018年5月号）、
岩波書店,2018）
5. 寺島実郎『ビッグ・ヒストリーにおける人類史』（『世界』第909号（2018年7月号）、岩波書店,2018）
6. 寺島実郎『一九六八年再考——トランプも「一九六八野郎」だった』
（『世界』第910号（2018年8月号）、岩波書店,2018）
7. 寺島実郎『グローバル・ヒストリーへの入口を探って』
（『世界』第911号（2018年9月号）、岩波書店,2018）
8. 寺島実郎『人類史における宗教の淵源』（『世界』第914号（2018年12月号）、岩波書店,2018）
9. 寺島実郎『世界宗教の誕生とその同時性』（『世界』第915号（2019年1月号）、岩波書店,2018）
10. 寺島実郎『現代日本人の心の所在地——希薄な宗教性がもたらすもの』（『世界』第918号
（2020年4月号）、岩波書店,2020）
11. 寺島実郎『新型コロナウイルス危機の本質——理性ある対応とは何か』
（『世界』第919号（2020年5月号）、岩波書店,2020）
12. 池田圭佑・榊剛史・鳥海不二夫・栗原聡『口コミに着目した情報拡散モデルの提案および
デマ情報拡散抑制手法の検証』（『情報処理学会論文誌数理モデル化と応用』第11号,2018）
13. 池田圭佑・榊剛史・鳥海不二夫・栗原聡『災害時におけるデマ拡散のモデル化から得られた
知見の報告』（「2017年度人工知能学会全国大会」第31回大会,2017）

14. 諫早庸一『十三—十四世紀アフロ・ユーラシアにおけるペストの道』（青土社,2020）
15. 石坂尚武『《峻厳な神》とペスト的心性の支配：一五世紀フィレンツェの立法・政策・判決に心性を読む』（同志社大学人文学会,2013）
16. 石坂尚武『一四世紀イタリアの時代状況とペスト』（同志社大学人文学会,2012）
17. 石坂尚武『黒死病でどれだけの人が死んだか－現代の歴史人口学の研究から』（同志社大学人文学会,2012）
18. 大谷明『文明と伝染病：その関連の歴史』（『日本細菌学雑誌』 58（4） 2003,2003）
19. 佐々木博光『ペストの創作－ニュルンベルクのユダヤ人迫害、一三四九年一二月五日』（大阪府立大学人文学会 人文学論集 28巻,2010）
20. 佐々木博光『近代ドイツの歴史教科書にみる中世のユダヤ人迫害』（大阪府立大学人文学会 人文学論集 30巻,2012）
21. 佐々木博光『黒死病とユダヤ人迫害－事件の前後関係をめぐって』（大阪府立大学紀要（人文・社会科学） 52巻,2004）
22. 立川昭二『交通と疫病』（IATSS review vol3,1977）
23. 中村昭『中世の流行病「三日病」についての検討』（『日本医史学雑誌』 第33巻第3号（1987年7月30日）,1987）
24. 脇村孝平『疫病のグローバルヒストリー－疫病史と交易史の接点－』（『地域研究』 Vol.7 No.2（2006年2月）,2006）